

編集委員長就任にあたって

この度、前編集委員長の守田先生の後を引き継ぎまして、今年3月に第100号が発刊されました由緒ある協会誌「水循環 貯留と浸透」の編集委員長を仰せつかりました河村です。なお、私に取りまして本誌を「雑誌」と呼ぶには余りに充実しており、ここでは「協会誌」と呼ばせて頂きます。

申し訳ないことに、私の本協会誌への貢献はほとんどありませんが、思い起こしてみますと唯一「雨水技術資料」16号（平成7年発行）に、当時私が九州大学建設都市工学科の助教授の時でしたが、本協会誌の「平成6年渇水」特集号に寄稿させて頂きました。私にとって研究の始まりは、昭和53年の福岡大渇水に関するもので、私の修士論文のテーマはその福岡大渇水を対象とした貯水池の利水操作に関する研究でした。その後も私の研究テーマは、渇水をメインとした水資源管理全般の研究を行っており、特に水資源管理の最適化手法や実時間予測・制御に関する研究を行ってきました。

1964年、水文学のバイブル書とも言われていますV.T. Chow教授編集主幹の「Handbook of Applied Hydrology」が発刊されました。そして、このハンドブックの発刊50周年を記念して、V.P. Singh教授が編集主幹でその全面改訂を行い、今年3月に「Handbook of Applied Hydrology (Second Edition)」が発刊されました。私は、この膨大なハンドブックの中の水文手法に関する一つの章（進化的計算：遺伝的アルゴリズム）を執筆担当させて頂きましたが、これは当時の水資源管理研究の賜物となっています。

私事で恐縮ですが、私は平成16年（2004年）10月に首都大学東京（当時の東京都立大学）

河村 明

Akira KAWAMURA

首都大学東京 大学院都市環境科学研究科
都市基盤環境学域 教授



に異動しました。首都大学東京に異動してからは、東京都を対象とした都市型水害に関する研究、特に集中型および分布型の洪水流出氾濫モデルの開発とその適用に関する研究を主として行っています。また、レーダ雨量計を用いた「ゲリラ豪雨」の解析や留学生による海外（特にベトナム紅河デルタやフィリピン・マニラ）の水問題などに関しても研究を行っています。

雨水貯留浸透に関する研究としましては、私の研究室では、「高度な地物データ GIS（地理情報システム）」と名付けた、浸透特性に基づく都市流域の詳細な土地利用種別毎の地物情報および雨水・下水道管網情報を組み込んだ種々のモデル（精緻な洪水流出氾濫モデル、地下水涵養モデル、蒸発散モデル）を提案・開発しています。これらにより、例えば、東京都神田川上流域での現存雨水貯留浸透施設による流出抑制効果や各種ヒートアイランド対策による気温低減効果などの評価を行っています。

以上の研究におきまして、またさらに、実は首都大学東京の都市基盤環境学域（すなわち土木系）教員の分担執筆による「都市の技術（改訂版）」（技報堂出版）が今年3月に発行されましたが、その著書の私の分担執筆の節におきまして、水循環に関する情報がくまなく網羅されています本協会誌を、大いに参考・引用させて頂きました。誠に感謝申し上げます。

これまで本協会誌への貢献はほとんどなく、一方的に本協会誌を利用させて頂き心苦しい限りでしたが、今回、編集委員長として、微力ながら本協会誌へ恩返しさせて頂くべく、邁進してゆく所存ですので叱咤激励のほど何卒よろしくお願い申し上げます。